勸善五常の玉

錦耕堂版

上

へ13
2378
31

遠 2378 317

緑亭川柳作
歌川國貞画

全四冊合巻二冊

勸善五常之玉 上巻

天保十五甲辰歳新梓

江戸馬喰町二丁目
山口屋藤兵衛版

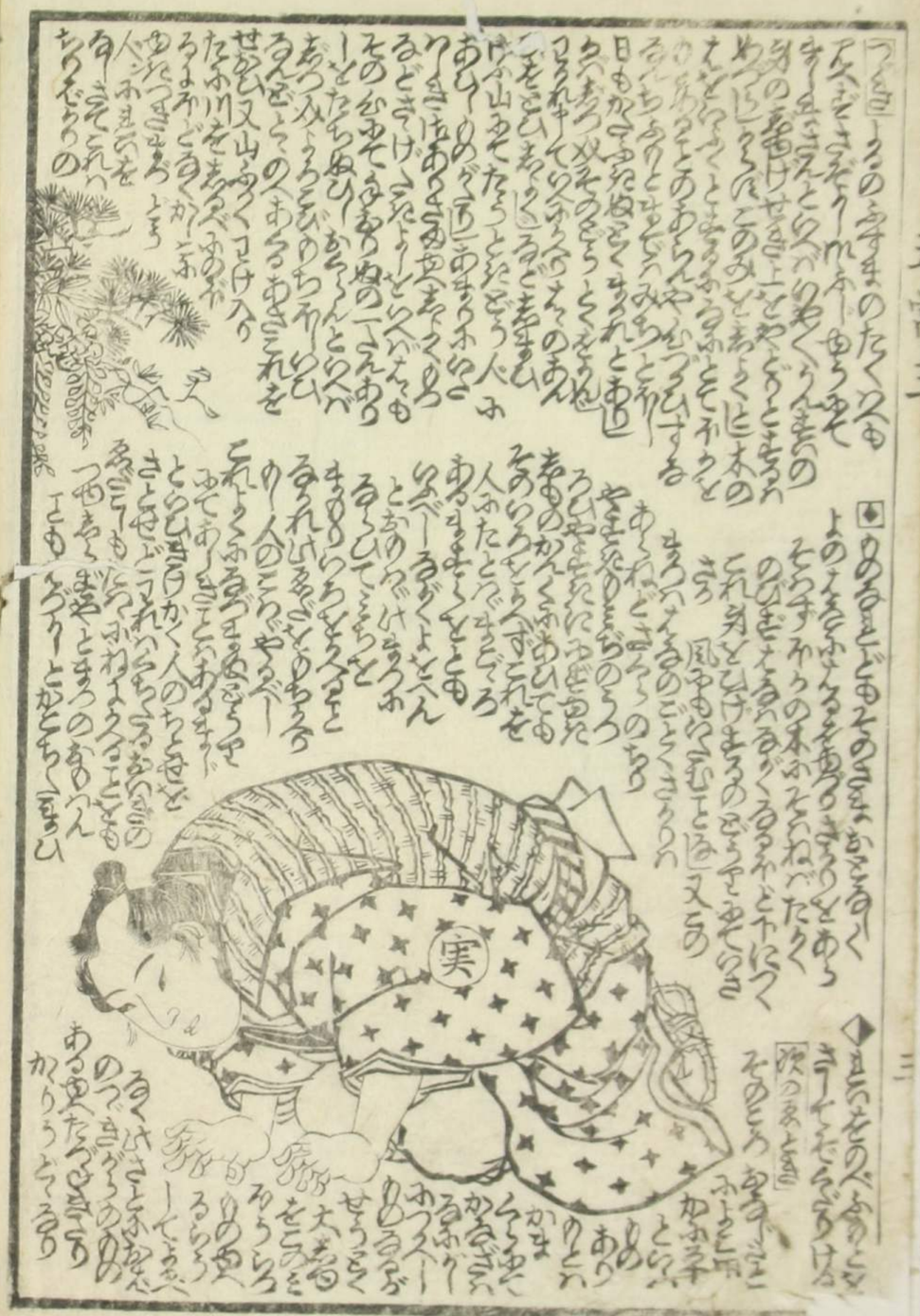
黄金いやしとあなき物なれども其の屑をだに眼に入るべ三界暗し
玉は寶の家とはなれど下和が玉なる疑ふ是がみるに
玉の緒を断ちそも男泣して時ならぬ目に鏡法師が櫛
を揃が如くまゝ魚目も一役勤て人の助となる則宝なるべし今
戯に綴り草子に善玉勸て悪玉懲の意あれば五常の玉と名附
れど下品の画玉珠の玉で維見ても唐の芋にて寺〳〵下品の物と
さまゝど何首烏玉の色黒も乳根の藥褐藹玉の見憎も疝氣
ふ絶あれば金玉の論爰に可有と実の智玉虚を書交まぜあれ根を
変も異名で云べ鍼炮玉目も貴べき音へあけれど書房へ當る勸
その十象盤の玉の春賣ふせんと悦て持行もとの

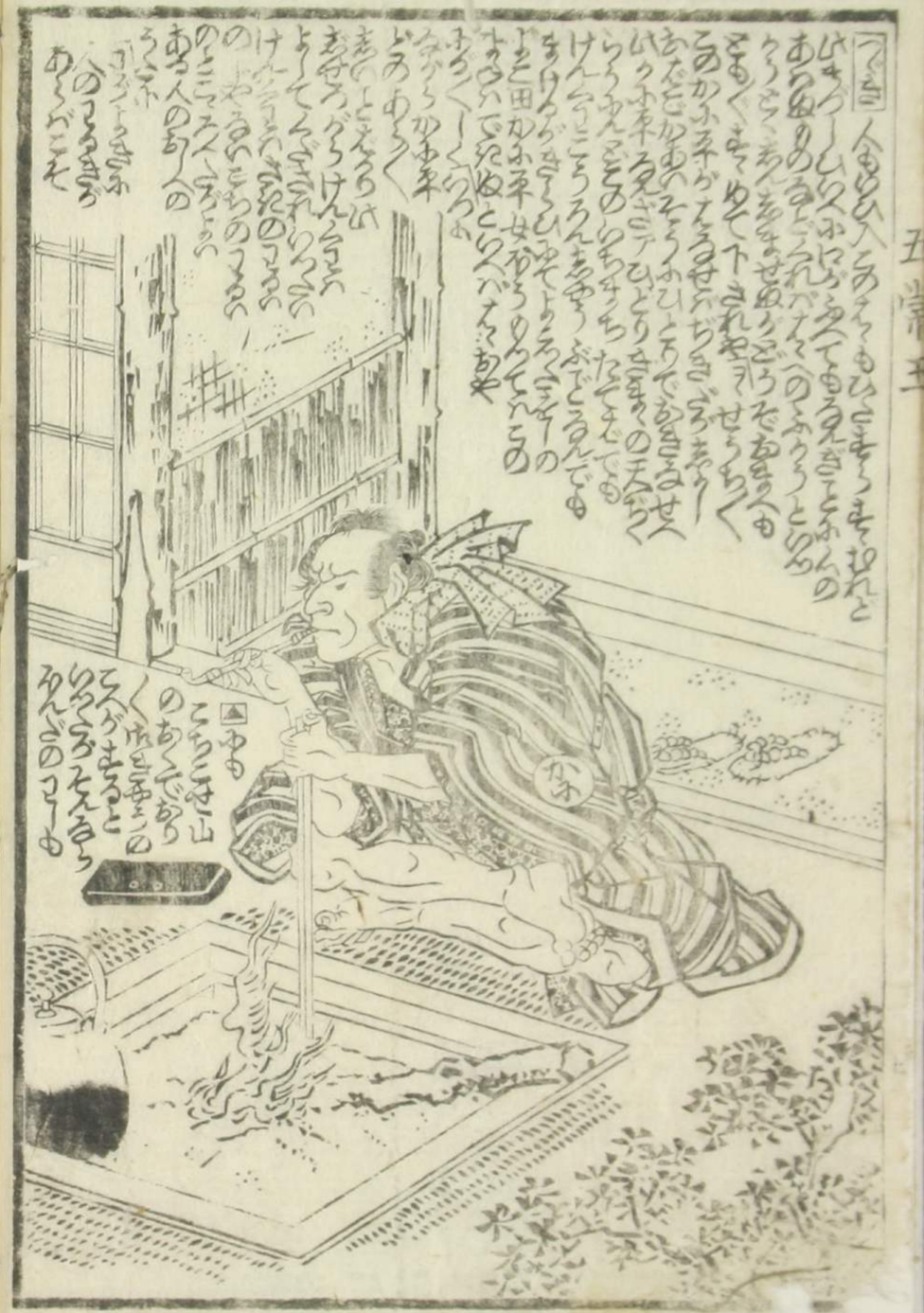
天保辰春新板

緑亭川柳誌

我あらしさも
ちろくしき
染うる
心ぶとあらきぶ
人おらうべて
甲に仰く
あるのかきるで
沢解ぬの
よとさまよ
ゆく
道を
ちかい
下女お福
横田
蟹平

藤花道人
おもしきく
ろろれあを
さまさまお
いるぎとりの
たちすゆもさえ
人さまぬ
源山子
こ家の
きこあた
みを
しらぬてや
まいう
ろく舟ん
白
浮世ぞ
山里
ぬぐるる
畑原實助





つぎに大ぜいのきこの
本あり。とりめとも
いいまきるぎホのきり
こぎんのうこよりみる
きりあくけれい
ひあとホあこそ
あろ めがたていそ
らてりこれそもいろホ
ホホ平とのこ平ろ
きこで〜あのよりと
あきれんそこる
たろろきりかホ平
ろぎこよろこ天を
ケけあこごよあん
このいけんがこホ
あこそあ人を
ホのりてこのとあり
ホて こまん

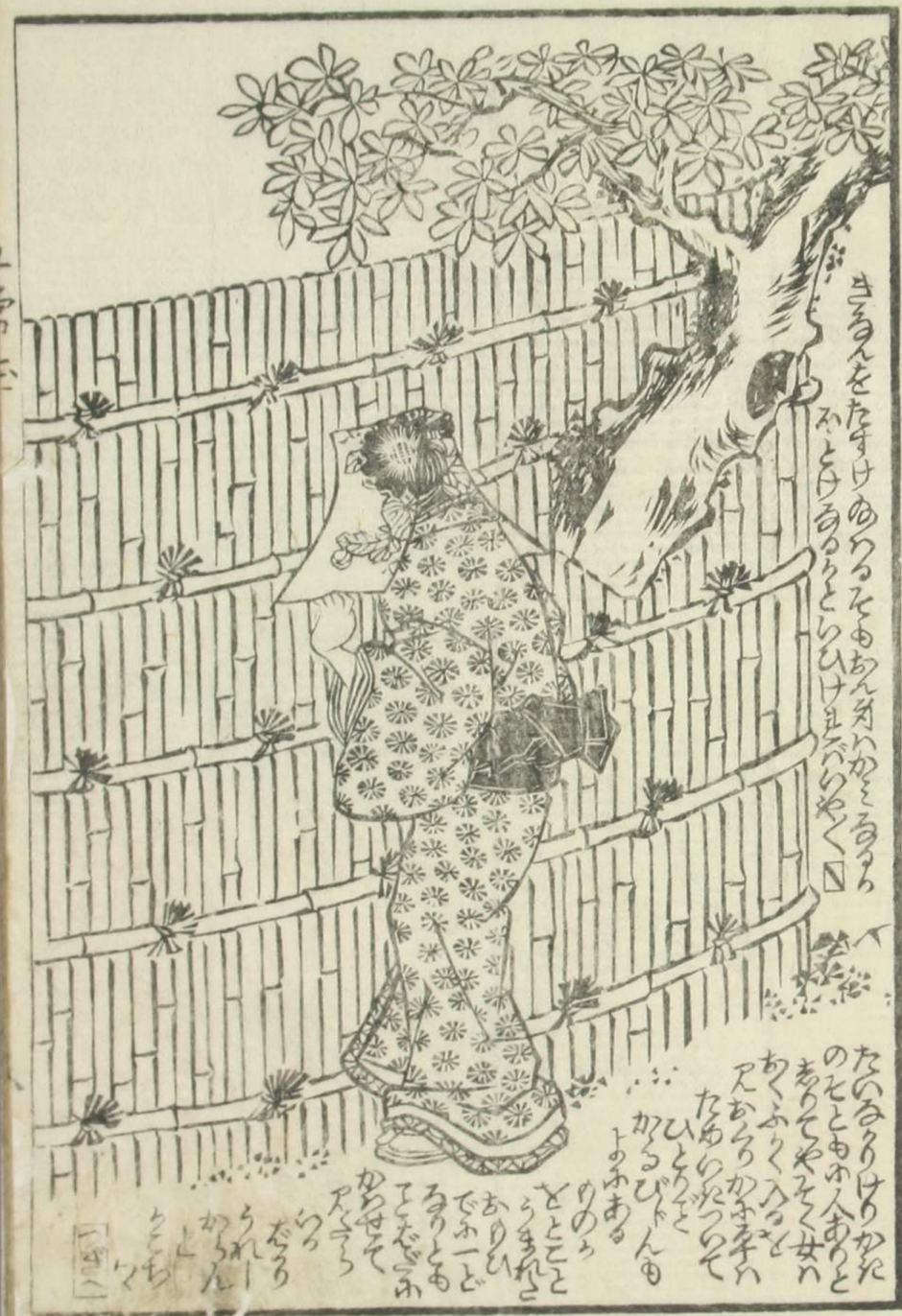
「つぎよりホ人の
つる木があ
こそ人の つる木
いつろ
つる木
ろ木ト
のどつきり
とりつぎ
こそ人ホ

ふろり
てんきけ
ホりく二日三日ハ

○左白むぎあーばし
もるーとつホやきうぎろ
るホのぎりてつるホ
あるこどもちのうけーろ
ちやくとよぶやのあり
るホ人るやとかこをつるホ
せいろくのとたくまーき山ぶ
るホようありてよびのやう
かホ平ぎりとせーぐりとろ
のるればころをちつめ
といいがされがよそのやう
たろぬる人ホあいぎる四
のぞこそ[illegible]るひそれホ又ろれホ
ホりてあどろをろぎろさあ
あちつくさ平あまろホあり
久ばかホ平るるホどあんこ
つろりりをさまぎごてホ

さけびにある日のもち
ちてやけのこちあ〜き
とそさけもまてまきをみさ
ぎしがふとぎ山ひらぎ
かのあつかぎてのめ
ぐてりふこちこを山の
いそよくてそうとつるこ
もくこれもかこの山へ
のやりてきことのたろ
とも人るぐぎこのうろ
うきとものたのこアそがやと
よく日あさろ山ホのボ
アきやくたろぬれども
さてふあれさや
あくふくろ〜こホ川
のあれがそれをくこし
のやりアるホさいぎたる
ひとりげホきろのえをもそ
あたるやねあっこそと
たちるあろをろるホ
うちあいたて人もるく
ろのえきろめかこホ
るりたりひとろあり
うホたんざありて
こも又ろきよの人の
そひられがそろやくもホ
ホぎりとあてん さそハ 白古ハ

○ものつえきく
あんきんあ
さとりとふ
あるこりとり
ざやてあらべ
これホ大きるのボ
とありそれを
さとろがそのせん
あをきろせの
むこひあて
ひろごよさけのあ
これをきりハ



下の段
さぐり
左の上段
あらびければ
せびるくやどへで
かくけるかくれく
つけきかふ年の
あきてまのこも
ふてろありとも
これをこそけふ
きてぶたまとも
いひつべたとろり

つぎ
中の下へ
つぎ
中の下へ

國貞画　川柳作

神傳秘方　油藥彭祖香

切きず挫傷の秘薬
婦人さん産後の痛ふよし

一貫代　四十八銅
二十四銅

錦耕堂製

抑此薬の根本は寛尋る小頃八建武年中楠正成公度々の合戦の折士卒戦場にて負傷
ふ矢きず刀疵又ハ馬のひづめふ蹴られ其ハ苦しみ甚の難渋甚
敷き正成公武功絶倫にて仁心深く彼ら士卒の労ハ則我労と
思ひ給ひ不便ふ思ひ給ひ士卒の為に自身ら調合し給ひ
伝ふる秘薬なりしが日夜用薬を工夫なり自身ら調合
製法して十年の間ふ彭祖香と名付ふ皆ふ施ふ給ひ
まるの人ふ成ふ其の効能ふ先祖ふ記ふ山ふ来ふ法ふ伝ふ筆
記ふて今ふ伝ふ後世ふ流布ふ世ふ人ふ為ふ世ふ人ふ為ふ
此薬ふ効能ふ包紙ふ記ふ

板元
山屋製

勸善五常訓

山口屋梓

下

歌川國貞画

全四冊

上よりつゞき ろうふうふありてこのさる かへのたんぶくちだおやまさ かくみそのもちさつて ぎなのまへに おきみをおかせたまそけしおりの めのまゝしておんをあやしけるゆゑ あまぎをあつまてふおめひあひぬの ふくろにまめをいれさるにてうせ山へ たるちかへせしふそのちゝ又おきてゐるり ゑりのさるのゐぜんのぬのぶくろふろうを いれてゐちきてるあまつぎをいだくびハ さるをごでめおさてあるそくるびふちう あきあんゐのゐどよびおつめふふりを かせこのあぐびをかくとりきせけのの さへおんをあるとかくのごとしますて 人とむまれおんをあらぬへちく しゆうゆゐおやへしとふうくけう ゑんをちゝ人ゐのちあそんゐいてり てもさるとこうすうのをせぞと ひふちくひをおゝの一まゝこれをそむ ろくかんどうありとのひたゞしてせゐ しぞかせさるもえるちかく人よれける されバとゝしすそもそのところにさるの 一ッせるころさぬよしこれハあやせ死あつとの ゆゑゆゑありて人のあるとそうぶつとのつのぞ人ハ えうさせるぞ それのけるものところきをつとの第一とき

◈それ人ハ 十あくの なかにめ ふも せう 一まう をいま しめ まへ あり ひとろ つみおひ ろうれのの 六ぞうふかんあしてあ ちそとあるこそる らぬとりやされバ かりゆもせうしやうハ せねとぞてなく その前山へなきかやれゐのやそのや つかぬでハなどり なまねがうるを うそこ山のは めとさとふるよ ふのうとに やきぞもあり ふるさも

川柳浜 国貞画

ごん談むかしの玉章

全四冊

甲居孟書

山口屋板

つゞき　ところのとうにゆくつれてゆくらく
あるいくゝばあやざるのゐるところへつれて
いんぐゝさそうれーがるぞあるきまゝよ
うくあるのやさそのるやりてくろ「ヨくそんをろ
そなーやれこうひいさそくあやざるどもが
ちゝーぐゝそわるそあるいろ　をるぐがかろの
あそおときけそぐちゝくゝびとるく
かどぐゝむろのなれをそをさろうろく
ろくそいちやとこらゝさんとんのあち
つゐもひさぐゝされがあるぐとこ
ろくきさを色ゝちをゝ色あや
このあゝのあゝられてゆまく
ゝそゝゝんゐけるさそゝさゝハ
ざるをいゝろ
ちのゝゝをゝろけ
又いあゝの
さぐゝゐ①

左分　かををつゝみさけるいきゆひゐいれて
たゐのうゝゐのぞゝさるぐゝつのいとゐゝとの
かやゝーどくぶゝさろけうこるとをけるゝ
とゆハふゝたゐそをゐあちてみぐゝふるゝん
あゝさまゝろりかるあゝゐかいをりくゝゐきろて
人やゝるかとよびゝゐりまゝかるあどを人
ゝまゝあそをゝをぐゐされんとす
かをゝろしきことなを
あひゝんぐをいまゐ
あるんとをるとと
まゝくゝをゐりあゝ奴
これをゝをゝむぐゝん
やこの人今ゝゐへ
あちてあゝるん
ゐゐとをゝーて
たゝをけゝてと
あせれど
せんゝと
ゐ⊗

⊗りあゝかゐ
さゝゝゝが
あちん
をぐゐを
あゝつけの
ゝゐつけを
あきれ
をゝて
てをゝ
あゝゝ
ける

①をゝろを
つけゐとゝて
やゝるひけれが日ゝぎを
つゝりてきをもゝ人
ゐる奴けゐゝをゐち
やゝんゝあゝ奴せをゐゐハて
山を一をゝゝりものゐをゝきゐ
ゐゐ山ゝゝらをゝゐえゝが⊙

⊙あやざるのゝをゝゝんをゐち
やゝゝんとゝゝうゝとをゝゐゐゐふゝゝ
山ひとゐひをゝきゝを人のゝをけゝがゝをゝる
奥ゐゐゐゝどをゝとゐをゝゝざめをゝゝうゝゝゝゐゐ
ひゝとゝり人あゝり山ゐゐ入ゝをゝきゝゝゝゝゝゝ
ゝをゝゝきゝゝゝゝゝゝ

つゞき おつ丸かの人をやどさしてさうよ
ろんぢうへよのけのめうちあるあるの
あれをたなぞくるゝふうれるきやとらへ
大ざうらうつのそ山のあたげをふうけ入りじう
あるに あやそえたしてのでうゆへあちの
かつらあまつことりのちてさこりかのさると
ごのちゞ天にふよぢのおりさけしかへのかぶれ
ゆゑかうらをさまとぞそかのをを木ふちうげ
あざへくふあすよみきつけそよみくときの
ねのうゝまよんぐれべ人もねのうくふちうおそ
山人をゆくねかふとうさこおやふきいのちを
たまそりけりおつ丸その人をかいふうして
つがるきをようろこべかの
山人もおつくれいを
のべそも
佐助へ

○ひつくの人をかくるとこる人さきあへせそさうとなる
らそらちめへとまらひあうぶおんるちそのてう
わうけずべくとるきさをぞしてようらとひつやとと
ろうるとさてしうどおつ丸かつてこれをらわずうりの
まえときの山人もせんのくふうりくまるきのぬの
ぶくろよりかきをふつくさしののぐこしこれへ
きらぞそせいしくるまさでくさまりとくさのぬあり
せめてのまんしとこれをおくりけれバおつ丸も
そのんざうとうけおさまてようりれさるのちを
かんどつてるふかしこの山をのぼるところにあげ
そのとぎスふ大ざる二ひきふてござるとあいし
おうあうさおやらのきのうちいをようろこぶ
みるべしさてござる入あぐふそびてたつされて
みるとうかしたのねのうくより大さるし二さをび
きさりござるをねらひてさくらんとまる
あらきあるいおやざるころ入その木の
さそききあぐとたいめてのちゃこあらふくらふ
大さるしハなれをそらしてまのちのんどふござる
のくらふちしてるところとたいめしあざを
ひつそぎせバまるどきさんちぎりさのらんそひふ
こしのきうあよくあくらりけん
なをてきもせんらくとまぶり
たちまちぢ人おちけるその
ときさるどもひくやとそびそう
こしのきおさへむ てつれ又へ
のんどさうひつるてうえるく
こしとあとやうるそのおやつぎ
上へ

下つゞき あるくへんけんわからだあたんとすしさあさそ
たくざとをかしおつ丸のめくい大ざるかけさりさうり
めきそをさらくてかしこへつれゆきさちぞつるふ
こしのさをとあそびりまとめ
これをのちのちの人二ひき
みなゑそであしい人ござると
のおやざるをとあまき
子をたすけるおんを
あそし山すくこそ
ひりふなり
おつ
すけ
らど
めく
こし
を
やそ
あびん
とさ
おか丸
ども
きそ
たす
うるべき
ゆうも
あざれべ

るへそ
かくげせあひ
のうくえのののかう
のがくうろれあんをなるある
けのの子しとかんどやてみちをなるるうよ
くざるおうらくだしやう申しくおやかぐさふせぞそおうたれふ
ことかさゆさふささむらひあまつたそひきさうりしハこれ
みのぐんぞへさこせんドなるよの山ぐうふらぞのあやそ
次へ

（つゞき）さるぐとたづねてまゐつてござり
ますおまへさまへさしあげるきはえ
のでござりますとねがつてまをしても
なぞ二タ月けふへのぼつてやろのあるじへ
人をとのへたのみてやるのとりたてる
のぞんでまゐりのぞんでくださりませぬ

神仙秘方 油薬彭祖香

これもおきまものこうの口とおもへばこそろ
さんかくりよのゆめろくかねられま
せぬとかくやまひはきかねどきたら
わかうさんくとおそれつてどようう
おそうかあのあそびへでもおいらで
おせうぜ「そうよげにおろう
あんぐりでおそれがでうもござりまへ
あのおきりげんはぞうがおも
まろのハイごとそへでも
ござりませねがあのおんよぶん
うのよろをつらのとうまんの
えるのたびのもねさまーくまくさ
かわやよいせんにざんさとあのさまき
ごふとろいふうこひうとやらでござろ
まちろうのんおかやありやアよあさまんがとまをる
とたびるまうくうさうよ「そんなら さきぞどある
うがつこうとひのとおよみるされ このごひうでござら
まきろ「みめくよみぞどふうがあるあうとおもさろ
ハイらくうまちまへふのとてぞかんおどりゆもくにさんか
でおんどきまりのまきヌうさひさうるくでもふもまへとも
よへとむつちうでもこゝろみるめます「そんならこそ
きうせやハイおきてまうやりまあようとたのみるるえなどそろ上て
「とるふたんざくつけるいよへがよそわね
「人いどうろや
「人とちぎて
ちるかときまてきかうちるのでそろ」「イヤおのーちのく

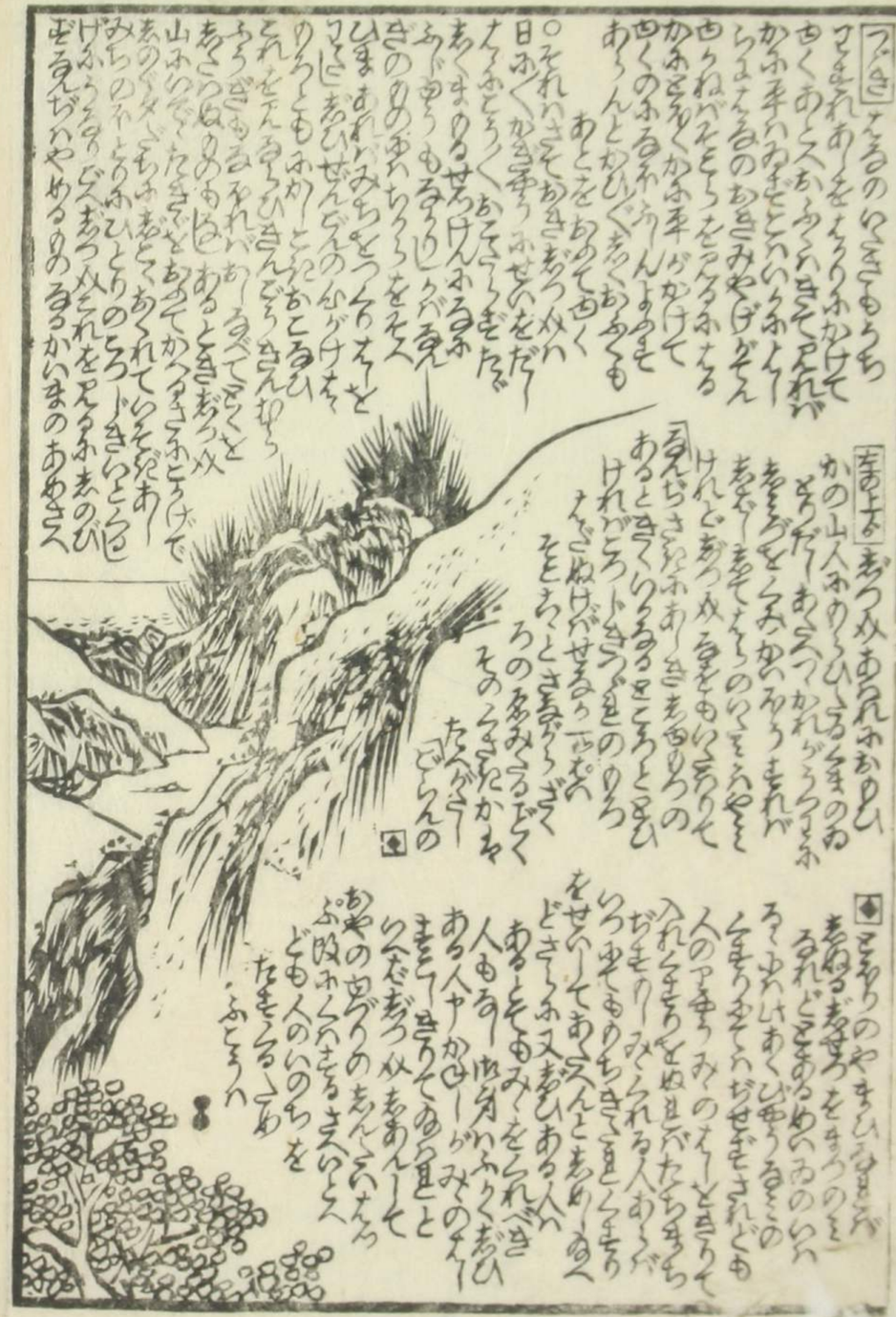
五常丸

ふ

ふ

つゞき

さるのいさもちつまれあゝをたろうふかけて
さくあとくちふらいきそこれば
かふ手いかをとういくふくんて
らはさるのあきみやげぞん
ゆうねばそとうをろふたる
かふそうくかふ手げかけて
ゆくのふるれうんよりそ
あゝんとかひくあくあくも
あとをあのそゆく
○それいさそあきあつ火い
日ふくかきあうふせのをだ
たゝふとうくあさゝうぎた
あくまるせうけんふるふ
ふゞゆうもるうしくば見
きのあのあちうゝをそん
ひまあれゝみちをつちたを
つとにあひせんぞのふげけた
のうゝともふかとこおこるひ
これをんるゝひきんぞうきんかう
ううぎゆるるれいあゝるゞてうくと
あきゝぬのあ也あるとき赤つ火
山ふいそくたきをあそかつきふとうげで
あのゞメぞもふあとあくれてらそぞあ
みちのそとうふひとりのうろゞきらとうを
けふうそうゞあつ火それをたるふあのひ
ぞるえぢいやめるのあるかいまのああさん



右の上

かの山人ふのうゝひうるくまのあ
そうだゝあくえつかれがうつくふ
きゝゞをくみかいのうまれが
あゝゝまそくうのいくをふやゝ
けれどあつ火をもいうりそ
「ゑんちさるのふあゝきあ也のうの
あるとうくいうるるところとをひ
けれがうゝよきゞ也のりつ
ゝをぬけがせるう一ぢの
そをうとさあゞうゞざく
そのうさたかそ
たゝがうゝ
ごらんの

◆こうりのやまひうなるゞ
あるゞあつをまつのゝ
ゑれどこあるめのあのいい
ろくゆいひあくひあうるこの
くまうあそういぢせぎをされども
人のアまうみゝのゝくときりて
入れくまうをぬるびたちまち
ぢまりゝみゝられる人あゝゞ
いうあそもりちきゝ見ゝくまり
をせいゝてあゝ人んとあり人
どさゝふ又あひある人い
あるとそもみゝをられべき
人もあゝ也分いふくあひ
ある人ヤかひゝがみゝのゝて
まゝゝきうてゆう見と
いくだあつ火あゝんゝて
あゝの也ゞうのあんゝいたう
ぷ改ふくいさるさゝいゝて
ども人のいのちを
たをうるゝあ
ふとうい

らとあゞぬれてあるむゝとさゝあゝうぬと
アゝゝふびあゝとゝとうひければ
ゝうゝきゝうれ
ゝとをだゝゝうん
のゝとうりのうん
ゞゝとりのゝ対ふ
あくあつのある
さゝあるふくい
るふさゝうあく
ちうゝうゝゝ
たちあも
るうゝゞ
たくゞさ
ゝと
いくば
右の中

東さを
ゆくうり
よゝみくい
あくくも
あゝゆゝ
せゞ
ゝあゞふ
あゝ東る
ようゝとゞと
ゝゝゞふ
ぬゝりう
山ゞゝる
二ツ
みゝの
をゞ
ようゝ
ゝうゝて
つぎゝ

つゞき こゝぞせんどとあゆみ これがちとの
いのちのあやうきをさとるやうに
とびてよろぼひながらこれをゝく
おつ女あとをおふて山人のくれ
さるぶのくすりをのみくに
つけれバちもとまり
たのもしいそくだ
されどもさおとうう
かけらる下女のおふく
はきせんにうろて
まぞふきまり
[illegible]
あんのむちぞろど
きるんをたすけんの
まとのへばおつ女ぞでん
[illegible]
あてつけ[illegible]女中
[illegible]
[illegible]
へあと
ゆて
やまず
[illegible]
[illegible]
山ちげへまゐりて

右の上より かぶえのたうきうさ
かくふとうくるとうおん
あるがよしまきひかよ
むぞそあき
めの夜
これらま
まちめて

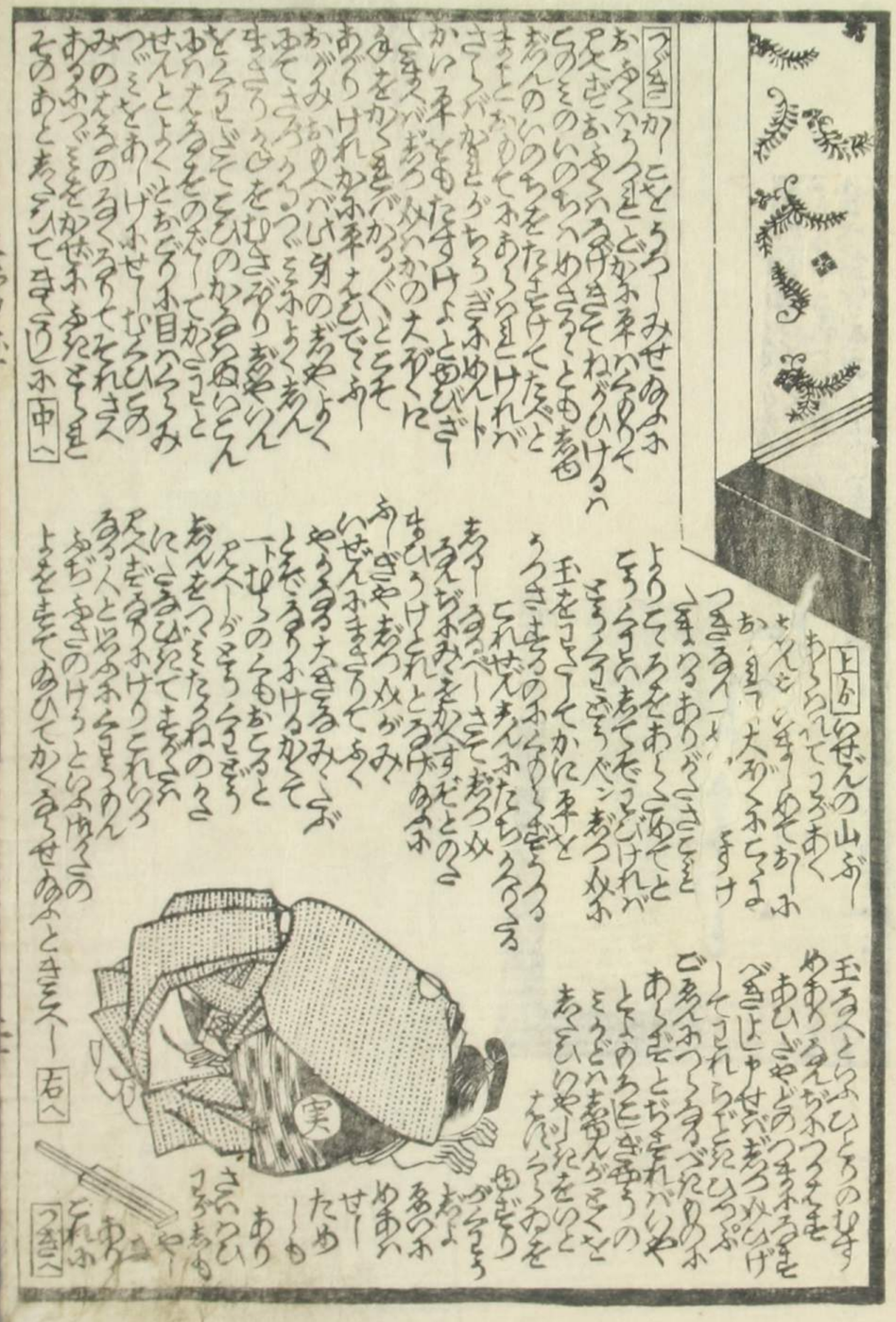
↑かまやくさまる
かりるんだらかみて
まよろーきるるのと
まよどるのうてうを
たれーなんとかりふうろ
おきことへんドそて[illegible]

それバ云ふのにかぶ平
むざんやよつんだひとの
おくりにあのとして
孫にぎこの大ぞくとをして
まひでゝるを
さへるを[illegible]
かぶ平
まつ
ぬを
かと
まで
おぐを
どうぞたまを
けんくとらふも
かくらきる
おきさきまおう
ぬなかーを
むろめんと
おふくも
さをもふちら
をすまれど
のかるく
ちどきも
せんぞたぞ
あき見と
ふるから
に 右の下へ

のぞむに見ともいと
なぞまきくおひあん
ふりーされバその[illegible]ふ
見をときざらるぞ
これハ五ーぢらの
玉とかりして

○その
身の
まのりと
るるたうるの
おくふんこれかむかへバ
なりそへずせうーとりる
あの見不思へべきとく
たゞーくらくふとあさむる
まのりとるる見りとかりに つぎへ

左の中ゑ



実
右へ
つぎへ

榮久堂刊行藏板略目

三笠亭仙果作 中本袋入 初編一冊 二編三編嗣刻
都妖婦傳
一陽斎豊國画

源氏五十四帖 極彩色錦繪
右ハ源氏物がたりの五十四帖をこゝろ〳〵画工丹精を尽し彩色を施し一帖毎に一場の趣意を分ち一図の絵ごとに其場の情を写し出す

御誂漆逢山鹿子 六編揃
しさいらしい故人柳亭種彦が作にて一くかのわれつゝぬの不破名古屋こゝろの色ゝ倒の新歌舞伎狂言の数々ばつてんくび巻をひらくとき八月をそなへ

菊壽堂霞盃 京山翁作 十編揃

永花百人一首文章抄 前書絵抄

朧月猫の草紙 京山翁作 七編揃

江戸よりー町おやぢ橋角
山本平吉梓

東都錦繪所